

平城宮東北官衙地区の調査

―第542次

1 はじめに

この調査は、国土交通省による平城宮跡歴史公園工事関連施設（平城宮第一次大極殿院築地回廊の復原整備のための工事ヤード）造成・建設にともなうものである。

同施設は、旧耕土とその上面の表土が露出した現地表面に1～1.5mに及ぶ盛土造成をおこなった上で建設される予定であるが、平城宮東張り出し部北半（仮に東北官衙と呼ぶ）、ことに今回の予定地を含む県道谷田・奈良線より北側の内裏東大溝SD2700から東面大垣までの広大な空間については、調査事例がほとんどない。隣接する造酒司の存在からみて官衙ブロックが展開していたとみられるこの地域は、水上池のすぐ南に位置し、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院がのる尾根と東院・法華寺の位置する尾根に挟まれた谷筋の源頭部分にあたり、複雑に遺構が展開することが予測された。

このため約10,000㎡の予定地のうち、木材保管庫と調整池予定部分の一部について、遺構面の高さなど遺跡の状況確認のための発掘調査が必要と判断された。調査はA区からF区までの6つの調査区を設けて実施した（図211）。A区とB区はそれぞれ東西20m南北4mの80㎡、C区とD区はそれぞれ東西7m南北4mの28㎡、E区とF区はそれぞれ東西4m南北7mの28㎡で、総発掘面積

は計272㎡となる。調査期間は2014年10月14日から11月27日までである。なお、調査の目的に鑑み、排水溝部分などを除き、断割調査は必要最小限にとどめた。

2 基本層序

今回の調査区における現地表面から奈良時代の遺構面までの深さは、平城宮跡における一般的な状況に比べて総じて浅く、遺物包含層もごく薄い。A・B・C・D区では、橙褐色礫土の地山面で遺構を検出した。E区では一部に整地土の黄褐粘土が残る。これに対し、敷地西南隅のF区のみは様相が大きく異なる。遺物包含層が厚く残る上に、全面に整地土とみられる橙褐色粘土の整地土が堆積する。以下、調査区ごとに概要を述べる。

A 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約25～35cmの深さで橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は、70.10～70.20mである。

B 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約25～40cmの深さで、橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は、69.70～69.90mである。なお、調査区中央には水田境界にともなうとみられる南北方向の約20cmの段差がある。

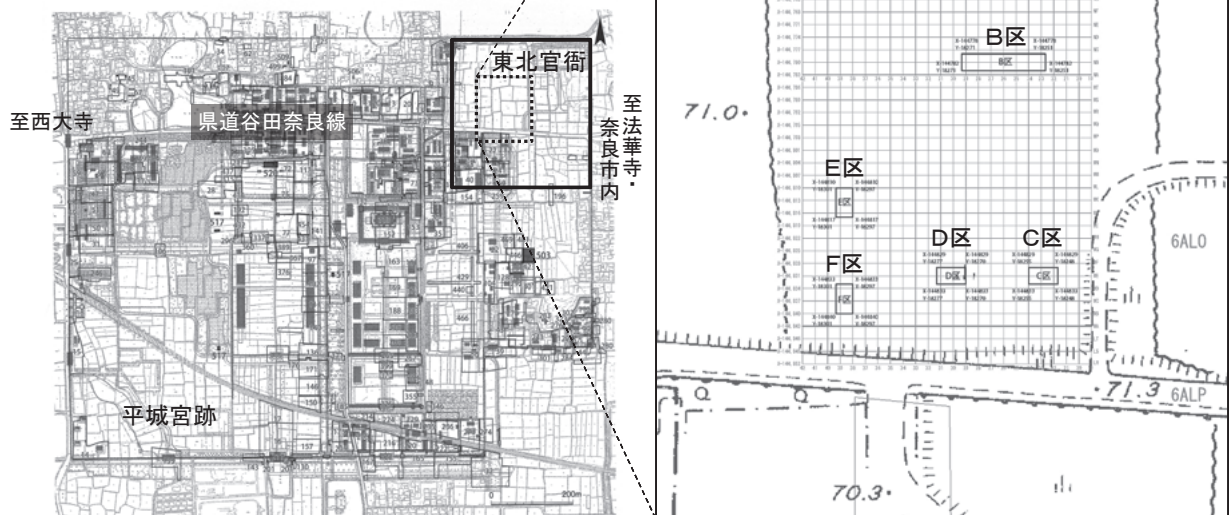


図211 第542次調査区位置図

C 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その直下の現地表面から約30cmの深さで、橙茶褐色粘土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.35mである。

D 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約30～40cmの深さで、橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.35mである。

E 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約35～50cmの深さで、黄褐粘土（整地土）または橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.40mである。

F 区 表土・耕土・床土の下に、奈良時代の土器を多量に含む遺物包含層（厚さ約20cm）があり、その下の現地表面から約0.6～0.7mの深さで、橙褐色粘土（整地土。厚さ約20cm）に達し、その下が灰色礫土（地山）となる。奈良時代の遺構は橙褐色粘土（整地土）上面（標高69.10～69.20m）で検出したが、一部遺構の稀薄な北から約2.5m分については、灰色礫土（地山）の面まで掘り下げて、下層の遺構の存在を確認した。下層遺構の検出面の標高は約68.95mである。

3 検出遺構

A 区

主な検出遺構には、柱穴8基、南北溝1条、性格不詳の土坑1基がある（図214・217）。また、排水溝の断面でSP19773・SP19793（図212）など柱穴の可能性のある落ち込みを6ヵ所で確認した。柱穴と認識している穴と組み合いそうなものもあるが、いずれも一部のみの検出で大きさや位置を確定しがたいため、建物と認めるには至らなかった。遺存する深さは0.6mに達するものもあったが、確認できる柱穴の多くは30～40cm程度であり（一辺1m近い柱穴でも同様）、遺存する深さの2倍以上あったものが削平を受けた可能性を考える必要がある。

土坑SK19755 調査区東端で検出した、一辺約1.5mの隅丸方形の性格不詳の土坑。断割の結果、約20cmで地山面を確認し、浅い皿状を呈することがあきらかになった。

柱穴SP19773 調査区北端西寄りでも一部を検出した柱穴で、柱は抜き取られている。掘方は一辺1mを越える規模をもつ。抜取から軒丸瓦6282Baが1点出土した。

南北溝SD19775 調査区西寄りでも検出した奈良時代と考えられる溝で、幅約0.7m、深さは約20cm遺存していた。第一次大極殿創建時の軒丸瓦6284Cが1点出土した。

B 区

主な検出遺構は、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、斜行溝1条、性格不明の土坑などである（図215・218）。

掘立柱建物SB19795 調査区東北隅でも検出したもので、近代の溝により輪郭を失っているが、一辺約1mの方形の掘方をもつとみられる。柱間約2.7m（9尺）で並ぶ2基の柱穴を確認し、これより西へは続かない。棟の方向は決めがたいものの、一応建物の西南隅部分と考えておく。掘方の遺存する深さは検出面から約30cmと浅い。東側の柱穴の抜取から、軒丸瓦6282Baが1点出土した。

東西棟掘立柱建物SB19800 調査区中央から西に続く柱穴列で、5基4間分を検出した。掘方は南北約1.5m、東西約1.2～1.5mに及ぶ、全体としてやや南北に長い隅丸方形で、柱間は約3m（10尺）等間。柱はすべて抜き取られている。深さは検出面から約0.8mで、上部40～50cm程度の削平を受けているとみられる（図213）。東側でも検出したSP19803と一連の可能性はあるが、柱間がやや広く、また南にずれるので、4間分とみておく。また、建物のどの部分かは厳密には特定できないが、水田の段差なども考慮して、一応北側へ展開すると考えておく。距離からみて、SB19795とは併存しないとみられる。

東西塀SA19810 SB19800の柱穴の東にこれと並ぶように検出した柱穴列。水田の境を限る東西溝SD19801の底で、3基2間分を検出した。柱間は約3m（10尺）で、南北約0.6m、東西約0.5mのやや南北に長い掘方をもつ。掘方の規模の割りに柱間が広く、東西方向の塀とみておく。SD19801によって壊されているため、さらに西に延びていた可能性も充分考えられ、SB19800にともなう足場穴などの機能を想定することも可能であろう。

性格不詳遺構SX19796 調査区東端でも検出した性格不詳の土坑状の遺構。東西約0.9m以上、南北約1.5m以上、深さは検出面から約25cm遺存する。

性格不詳遺構SX19830 調査区西南隅でも検出した性格不詳の土坑状の遺構。東西約1.1m以上、南北約1.7m以上、深さは検出面から約25cm遺存する。

斜行溝SD19809 調査区中央を北東から南西方向に横切る溝。重複関係からみて奈良時代よりも古い時期の遺

構の可能性がある。幅約40cm、遺存する深さは約15cm。

東西溝SD19801 調査区を東西に縦断する溝。水田境界の段差の下面に沿って延びる近世以降のものであろう。幅約40～60cm、遺存する深さは約30～50cm。

東西溝SD19802 調査区北端を縦断し西端は北に折れる可能性のある近代の溝。西で北にやや振れている。法面を確保せず直に掘り込んでおり、掘り込み面から0.8m以上、遺構検出面からでもさらに40～50cmまで達することを確認したが、周辺の遺構保全を考えて完掘を避けたため性格は不詳。礫混じり土で堅く突き固めている部分と耕土を無造作に入れている部分とがある。電気系統など、何らかの埋設用の掘方か。

C 区

主な検出遺構は、掘立柱の柱穴とみられる遺構3基、土器廃棄土坑1基で、ほかに小穴多数を検出したが、いずれもまとまらない(図216・220)。遺構の状況や、奈良時代の遺構検出面で耕作溝をあわせて検出している状況から考えると、奈良時代の遺構はかなりの削平を受けているとみられる。なお、排水溝での断面観察によると、遺構検出面の下位において、東院中枢部の調査(第401次調査など)でも確認された細かな縞状の堆積がみられ、版築土の可能性も考慮したが、地山の自然堆積と判断した。東院中枢との類似は、少なくともC区が谷筋からやや東に外れた位置にあることを意味しよう。

柱穴SP19840 調査区東部で検出した柱穴。掘方は東西約0.6m、南北約0.8m。柱は抜き取られている。

柱穴SP19850 調査区北部中央で検出した柱穴。掘方は東西約0.6m、南北約0.8mで、柱は抜き取られている。掘方は揃わないが、抜取はSP19840と約2.7m(9尺)の間隔で東西に並ぶため、一連の建物の可能性もある。

柱穴SP19860 調査区西南部で検出した大型の柱穴。東西約1.1m、南北約1.3mの南北にやや長い方形の掘方をもつ。柱は抜き取られているとみられる。

土坑SK19855 調査区南辺で確認した土坑で、東西約1m、南北は1m以上で調査区外に展開する。遺存する深さは約10cmと浅い。

D 区

主な検出遺構は、掘立柱建物1棟、単独の柱穴2基で、ほかに四周の排水溝の断面で、柱穴の可能性のある落ち込みを4カ所確認している(図221・224)。

掘立柱建物SB19870 南側柱筋または南廂の東南隅部分とみられる柱穴2基を検出した掘立柱建物。後述のように、東面にSD19871、南面にSD19872がめぐることから、建物と判断した。溝までの距離は東面の方が長く、どちらかといえば南北棟の可能性が高いが、SD19872の南限が確定できないため、溝心位置が決められず、東西棟の可能性も否定はできない。掘方は一辺約1.3mの隅丸方形で、柱はいずれも抜き取られている。西排水溝での断面観察によれば、遺存する深さは約0.6mで、本来の深さの半分程度の削平を受けているとみられる(図219)。

南北溝SD19871 SB19870の東雨落溝と考えられる素掘りの南北溝。幅約0.6～0.7m、深さ5～10cm程度が遺存する。SB19870東端から溝心までの距離は約1.5m。調査区南端で東西溝SD19872に接続するが、T字に接続してさらに南に延びる可能性もある。

東西溝SD19872 SB19870の南雨落溝と考えられる東西溝。南限は調査区外となり、幅約1.1m以上、深さ約10cmが遺存する。東端はSD19871と接続する。

柱穴SP19873 調査区東北隅で検出した柱穴、掘方は一辺約80cmの方形。柱は抜き取られている。

柱穴SP19875 調査区西南隅のSD19872の底で検出した柱穴。調査区外に続く。掘方は一辺約0.7m以上の方形。遺存する深さは約20cmで、底面の標高はSB19870の柱穴より約40cm浅い。柱は抜き取られているとみられる。

E 区

主な検出遺構は掘立柱建物1棟で、ほかに北面の排水溝の断面で、柱穴1基を確認している(図222・226)。

総柱掘立柱建物SB19890 調査区南半で検出した総柱の掘立柱建物。方形に並ぶ柱穴4基を検出した。掘方は一辺約1mの不整形方形で、柱はすべて抜き取られているとみられる。深さは約0.6～0.7m遺存する(図225)。柱間は東西方向が約2.1m(7尺)、南北方向は約1.95m(6.5尺)で、南、および東西(またはそのいずれか)に展開し、倉庫の可能性のある建物の北端の一部と考えられる。

F 区

橙褐色粘土の整地土面で検出した主な遺構としては、溝1条と、調査区南西隅部分に集中する4基の掘立柱の柱穴があるが、近接しており建物としてはまとまらない(図223・227)。

東西溝SD19921 調査区中央で検出した東西溝。幅約

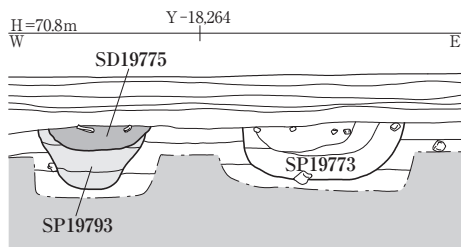


図212 第542次調査A区北壁土層図(部分) 1:50

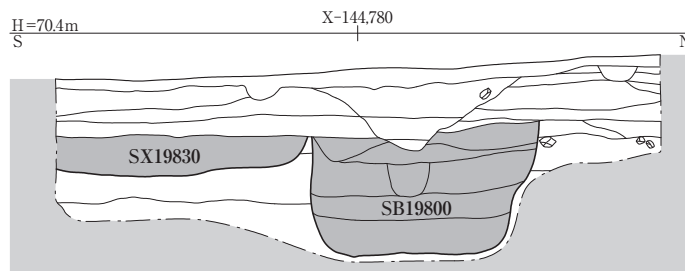


図213 第542次調査B区西壁土層図 1:50



図214 第542次調査A区全景(東から)



図215 第542次調査B区全景(西から)



図216 第542次調査C区全景(東から)

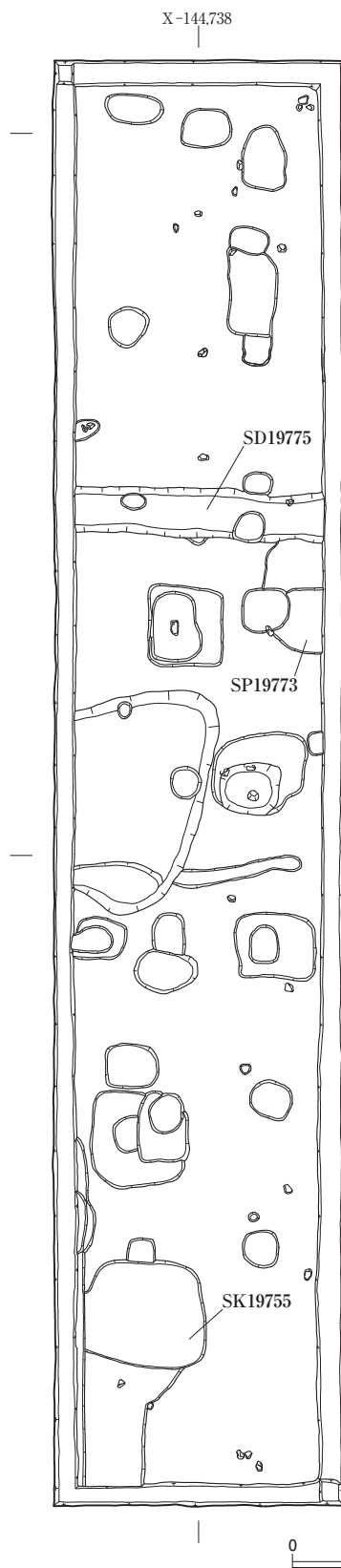


図217 第542次調査A区遺構図 1:100

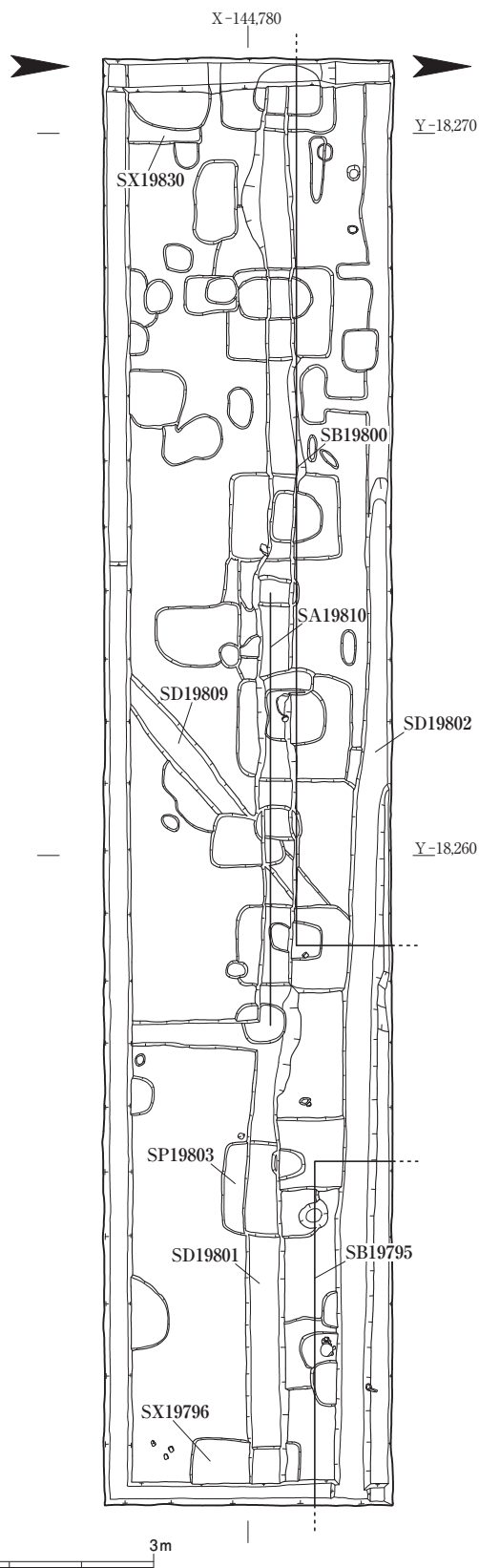
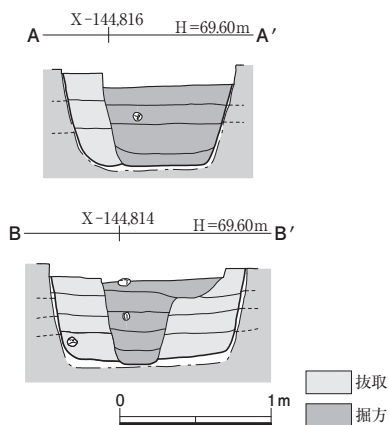
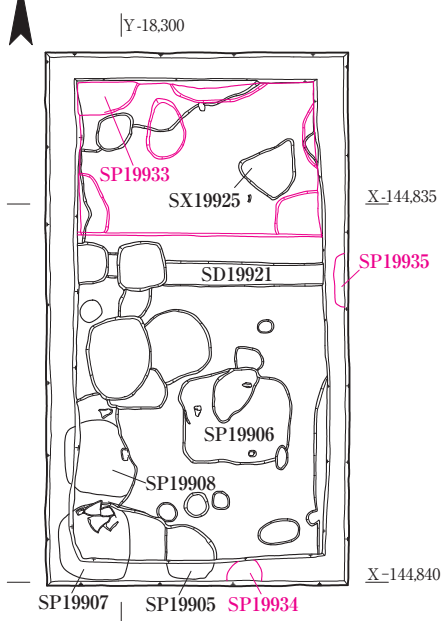
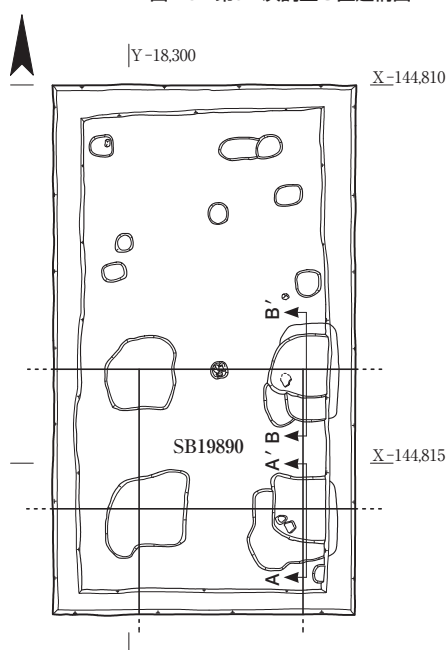
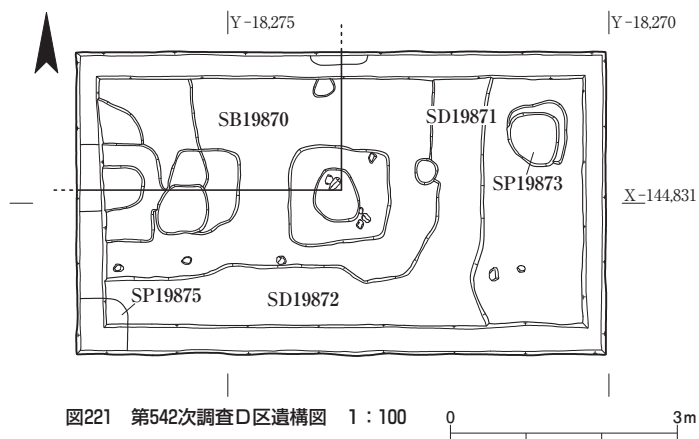
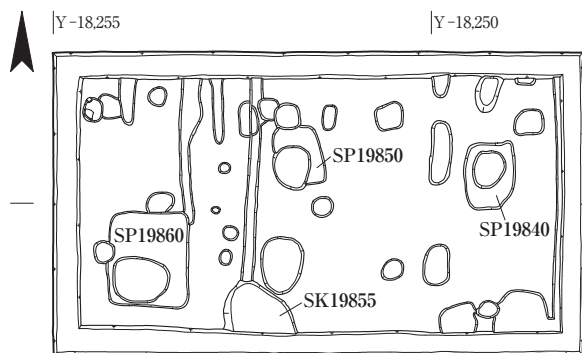
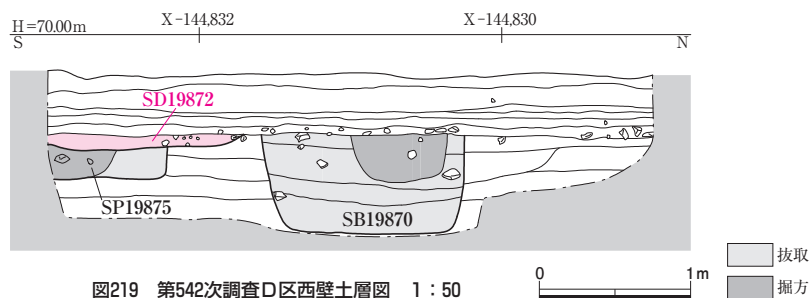


図218 第542次調査B区遺構図 1:100



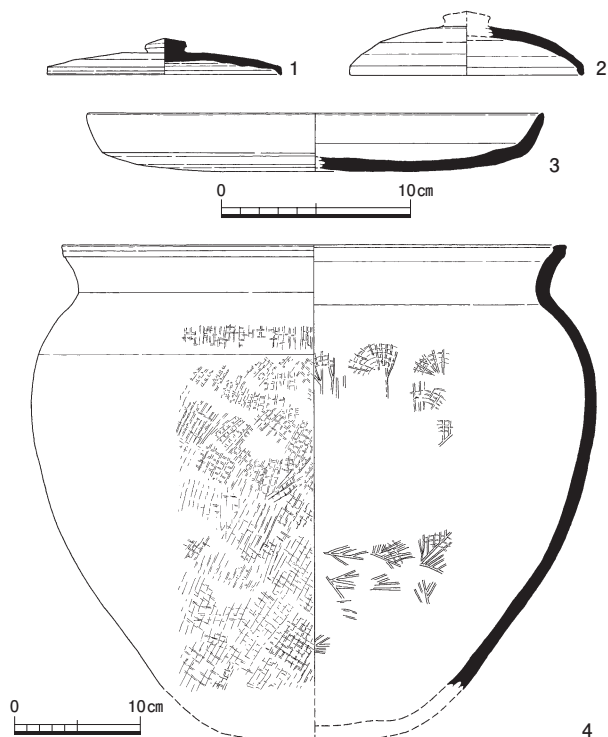


図228 第542次調査出土土器 1：4（4は1：6）

30cm、遺存する深さは約5cm。

柱穴SP19905 調査区南辺中央で検出した一辺約0.7mの不整形の掘方をもつ柱穴。遺存する深さは約0.5m。

柱穴SP19906 調査区南部中央で検出したもので、東西約1.4m、南北約1.2mの掘方をもつ。

柱穴SP19907 調査区西南隅で検出した。掘方は一辺約1mの隅丸方形。深さは約0.6m遺存する。抜取に多量の甕の破片や軒平瓦6721Cが1点投棄されていた。

柱穴SP19908 SP19907の北に隣接する一辺約1mの不整形の掘方をもつ柱穴。遺存する深さは約0.5m。

次に、地山の灰色礫土の面で検出した下層の遺構には、柱穴の可能性のある穴3基（うち2基は排水溝とその断面で確認）のほか、凹み状の落ち込み多数がある。下層部分の調査面積が狭小であるため、遺構としてまとめるものは確認できなかった（図223）。（渡辺晃宏）

4 出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ10箱分の土器が出土した。奈良時代から近世までの土器が出土したが、大半は奈良時代の須恵器・土師器である。特に須恵器甕類の破片が多く出土している点が特徴といえる。また、各遺構・遺物包含層からは奈良時代前半から末頃までの土器片が出土しており、奈良時代を通じて調査区周辺が利用されていたことを示唆する。この他、本調査区からは墨書土器2点、蹄脚円面硯の脚部1点、須恵器杯B蓋転用硯11点、甕転用硯1点が出土した。図228の1・2はB区の掘立柱建物SB19800東南隅の柱穴出土の須恵器杯B蓋。

表29 第542次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6225	A	1	6721	C	3	平瓦（ヘラ書）	1
6282	Ba	2	型式不明		1		
6284	C	1					
軒丸瓦計			4	軒平瓦計			4
				その他計			1
				丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩
重量			23.475kg	62.166kg	0	0	0
点数			222	786	0	0	0

頂部から緩やかに口縁部が降り、口縁端部を丁寧に折り曲げる。奈良時代前半から中頃までに位置付けられる。3はF区遺物包含層出土の皿A。精良な胎土で灰白色の色調を呈する。内外面に火襷痕が残る。底部外面に墨書がある。4はF区の柱穴SP19907から出土した須恵器甕B。軟質の焼成で、内面に放射状の刻線を施した当て具の痕跡が残る。F区からは遺物包含層も含めて多くの須恵器甕片が出土した。（小田裕樹）

瓦磚類 概要は表29に示す通りである。軒瓦7点はいずれも奈良時代のもので、出土地点の内訳は、A区の柱穴SP19773抜取とB区の掘立柱建物SB19795の東側の柱穴抜取から6282Baが各1点、A区の南北溝SD19775から6284Cが1点、A区遺物包含層とF区西南隅の柱穴SP19907（抜取か）から6721Cが各1点、F区の遺物包含層から6225Aと型式不明の軒平瓦各1点となる。ヘラ書平瓦はF区の性格不詳遺構SX19925出土。「×」ないし「十」とみられる記号状のもの。（今井晃樹）

5 まとめ

内裏北外郭官衙から平城宮東北隅に至るこの地域では、従来ほとんど調査事例がなかった。この地域は平城宮の東張り出し部北半北寄りを占め、官衙施設が想定されていた（東北官衙）が、今回の調査成果はこれを裏付けけるものとなった。なかでも、甕など土器の多さは今回の調査区の南に位置する造酒司との関連を想起させるものがある。小面積の部分的な調査であったが、この地域の様相を解明する大きな手がかりが得られたといえる。

この地域は水上池のすぐ南にあたり、現地形から考えても第二次大極殿院・中央区朝堂院と東院に挟まれた東方官衙の谷筋の源頭にあたるとみられていた。しかし、基本層序の観察によると、東院西辺の谷筋から尾根筋に上がる部分の状況と酷似しており、谷筋とはいい難いことが判明した。その中では南西隅に設けたF区に分厚い包含層がみられることや、検出面の標高がもっとも低いことから考えると、谷筋は今回の調査区の西に位置する可能性が高いとみられる。また、この地域の奈良時代の遺構面が予想以上に浅いことがあきらかになったのも、今回の調査の大きな成果の一つである。（渡辺晃宏）